

転居と因縁

新田 由紀子

築 50 年の小さな 3 階建て老朽マンション。仮住まいとはいえ、なぜここを転居先に選んだのか。

窓から駅のホームが垣間見える。私鉄、地下鉄ともに駅まで徒歩 1 分。これが決め手だったわけではない。駅前の緑濃い遊園地は 2 年前に長い歴史の幕を閉じていた。園地を貫く石神井川の台地に広がる住宅街は、近年建ったマンションを除けば、年季の入った庭を巡らせた昭和な佇まい。その一角には昔通った幼稚園も健在だ。

実家はここから近かった。材木屋を継いだ兄に建ててもらって 30 年住んだ今の家も近い。1 人ずつ家族が減り、1 人残ったのうのと暮らしてきたが、庭付き戸建ての切り盛りには年金暮らしの首が回らなくなってきた。売ってしまおうか、貸家にしようか。考えるだにおおごとで心許ない。で、社宅住まいの次女夫婦と話し合いが成立。いずれ先の同居を前提に、家を明け渡す。まずは私が出て、空いた家に、新入学と入園児を抱えた一家が春と共にどどっと入居してくる。

70 年のあくたもくたを整理して、何を好き好んで、しょんぼりとした風情で佇む古いマンションの 1LDK を選んだのか。物件はいくつも物色した。こぎれいで、機能的なコンクリートの箱。使い込んだ家具を配して暮らしを描いてみるが、なんとも息苦しい。

子供の頃の思い出の残る界限で見つけたのは、戸数 5 戸の建物の最上階。すりガラスとタイル貼りの外階段をぐるりと上がると、鮮やかな紅梅と大ぶりの木蓮が目に入った。飛び石を配した庭は大家さんのお宅だという。1 本のヒマラヤ杉が伸びてきて、3 階の物件のベランダに枝を垂らしている。西の窓からはうっすらと山が望める。心に何かは流れてきて、ここに決めた。

高齢の入居者のせいで契約は渋られたが、いざ挨拶に行けば、つい話の弾んだ品のいいマダムは、なんという奇遇か因縁か、亡き兄の元妻の親友とわかる。

兄が建ててくれた家を移ろうという時に、兄は縁を介して私を導いてくれたように思えてならない。